A Study on the Interpersonal Relations : Like or Dislike and its Perception in Triad

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20584

対人関係に関する研究
——3者間における好悪感情とその認知——

太 田 雅 夫

A Study on the Interpersonal Relations : Like or Dislike and its Perception in Triad

Masao OHTA

目 的

これまでTagiuri, R. (1953)は，pのoに対する心情関係と，oのpに対する心情関係に関するo認知との一致について，これを相応性(Perceptual-Affective Congruency) の問題として研究した。

筆者は，先回の研究報告(1991)で，2者間の好悪感情とその認知に関して検討した。そして，小学校4年のクラス内の相互選択集団における選択段階別に認知の正確性，相応性，相互性等の関係を明らかにした。

このように，2者間における相手に対する好悪感情と相手の自分に対する好悪感情の認知との関連は，前回の研究報告である程度解明されたが，3者間の好悪感情とその認知間の関係も，これらの2者間の好悪感情とその認知との関連のもとに考察しなければならない。

岩下(1964)は，既に第3者間の好悪関係についての認知と，2者関係における相手の自分に対する好悪感情についての認知に着目してきた。また，大橋(1956)は，pのoに対する好悪感情とqのoに対する好悪感情の認知とが関連することを明かにした。そしてpのoに対する好悪感情とpのqに対する好悪感情が異なる場合にqがoに対する好悪感情のpによる認知は，Heider, F.のいうバランス理論の通りにはならないこと，pがoやqを嫌っている場合にもバランス理論が当てはまらないことがあるという指摘をした。そして，"pは自分が好意的なoはすべての他の人から好かれ，自分が非好意的であるような者は誰からも嫌われていると知覚する傾向がある" という。

しかし，pのoに対する好悪感情と，qのoに対する好悪感情のpによる認知との関連は，pのqに対する好悪感情との関連においてみる必要があると考えられる。また，これまでの研究では，qとo相互の好悪感情に対するpの認知を，「仲良しペアー」や「仲わるペアー」というような単位形成とみたり，好悪感情とその認知を正と負という二件法によって把握したり，正，ゼロ，負という三件法によって把握するのが主流であった。しかし上記の諸問題の検討に際しても，量的に把握する必要があろう。

本研究では，このような点を考慮しながら，3者間にみられる好悪感情とその認知を，個人Iが任意のJとKに対する好悪感情とJ，K間の相互の好悪感情についての個人Iの認知との関連を中心に検討しよう。個人Iが好意的なJは，Iが好意的なKであればあるほどそのKから好かれ，個人Iが非好意的であるJは，Iが非好意的なKであればあるほどそのKから嫌われていると知覚することが予想される。これらの予想を検証することが本研究のねらいである。

方 法

被調査者；金沢市立泉野小学校6年の1クラ

平成3年9月17日受理

ス，３２名（男子１６名，女子１６名）

調査日時；１９９１年６月１９日，午前８時５０分から１０時１０分までの時間を要した。但し，男子１名は当日欠席したため，その者については後日調査を実施した。

調査用紙；調査用紙は，男子用，女子用各３問ずつからなり，第１問では，本人の同性の他者に対する好悪感情を，第２問では，同性の他者各々の本人に対する好悪感情の認知を，第３問では，同性の他者相互の好悪感情の認知を尋ねた。各問では，クラスの男子（または女子）全員の氏名を印刷しておき，それぞれに対して７段階の評定をさせた。好悪感情の評定水準は，次のようなものであり，それぞれに得点を与えた。「とても好き」（７点），「好き」（６点），「どちらかというと好き」（５点），「どちらでもない」（４点），「どちらかというときらい」（３点），「きらい」（２点），「とてもきらい」（１点）であった。好悪感情の認知の評定水準は，各被調査者に対して同性の相手がもつと思われる好悪感情を，「とても好かれていると思う」から「とてもきらわれていると思う」までの７段階得点を，他者相互の好悪感情についての認知の評定水準は，各人（表側に氏名を印刷）は，各人（表頭に氏名を印刷）に対して「とても好きだろう」から「とてもきらいだろう」までの７段階得点を与えた。マトリックス状の各欄に段階得点を記入させた。

処理方法；主として，３者間の関係を中心として分析することにした。Ｊ及びＫに対するＩの好悪感情，Ｋに対するＪの好悪感情に関するＩの認知，Ｊに対するＫの好悪感情に関するＩの認知を検討することにした。ＪのＫに対する好悪感情についてのＩの認知は，配列Ｃ（Ｉ，Ｊ，Ｋ）というように３次元の変数で表わすことができる。この場合，最初の添え字は認知者自身を，次の添え字は好悪感情をもつ主体を，最後の添え字は好悪感情の対象を示している。このように表わすとすれば，Ｊに対するＩの好悪感情はＣ（Ｉ，Ｉ，Ｊ）｛この場合は，認知者自身と好悪感情を持つ主体が同一人となるため，これを単純化して，以下Ｃ（Ｉ，Ｊ）とする。｝，Ｋに対するＩの好悪感情はＣ（Ｉ，Ｉ，Ｋ）｛同様に，以下Ｃ（Ｉ，Ｋ）とする。｝となり，ＪのＩに対する好悪感情についてのＩの認知は，Ｃ（Ｉ，Ｊ，Ｉ）となる。

結　果

１）ＩのＪ及びＫに対する好悪感情及びＪのＫに対する好悪感情についてのＩの認知

まず，ＪのＫに対する好悪感情についてのＩの認知Ｃ（Ｉ，Ｊ，Ｋ）の水準別に度数をみると，表１の通りとなる。この度数は，あるＩがあらゆるＪのＫに対する好悪感情についての認知の数をＩについて合計したものである。

表１　ＪのＫに対する好悪感情に関するＩの認知水準別　数

c(i, j, k)	男子 数	男子 %	女子 数	女子 %
1	207	6.161	90	2.678
2	111	3.304	240	7.143
3	241	7.173	347	10.328
4	1459	43.422	911	27.113
5	663	19.732	912	27.143
6	369	10.982	613	18.244
7	310	9.226	247	7.351
計	3360	100.000	3360	100.000

ＪのＫに対する好悪感情の認知は，各個人の認知数が２１０個であるから総計３３６０個となる。　男子の平均は，４．３７１，標準偏差は２．５１２，女子の平均は，４．５３０，標準偏差は２．０１３で，女子の方が，若干認知が友好的であるといえる。男子では評定値が１や４の場合が顕著に多いが，とても好きという認知やとても嫌いという認知は相対的に少なく，どちらでもないという中間程度の認知が多いという傾向は，一般的なものであろう。

次に，JのKに対する好悪感情のIによる認知C（I，J，K），IのJに対する好悪感情C（I，J），IのKに対する好悪感情C（I，K）の関連をみることにしよう。

性別にC（I，J，K）の水準ごとのC（I，J）とC（I，K）別　数を示すと，表2の通りとなる。

表2　JのKに対する好悪感情についてのIによる認知水準別　IのJ及びKに対する好悪感情

男子　C (I, J, K)＝1

C (I, K) / C (I, J)	1～3	4	5～7	計
1～3	16	4	7	27
4	44	6	2	52
5～7	110	13	5	128
計	170	23	14	207

χ^2＝13.307＊＊＊

C (I, J, K)＝2

C (I, K) / C (I, J)	1～3	4	5～7	計
1～3	4	9	15	28
4	9	6	4	19
5～7	25	16	23	64
計	38	31	42	111

χ^2＝ 4.150＊

C (I, J, K)＝3

C (I, K) / C (I, J)	1～3	4	5～7	計
1～3	12	15	29	56
4	17	23	37	77
5～7	34	36	38	108
計	63	74	104	241

χ^2＝ 3.489

C (I, J, K)＝4

C (I, K) / C (I, J)	1～3	4	5～7	計
1～3	18	86	124	228
4	66	183	213	462
5～7	77	248	444	769
計	161	517	781	1459

χ^2＝0.402

C (I, J, K)＝5

C (I, K) / C (I, J)	1～3	4	5～7	計
1～3	13	24	56	93
4	15	42	118	175
5～7	21	84	290	395
計	49	150	464	663

χ^2＝10.129＊＊

C (I, J, K)＝6

C (I, K) / C (I, J)	1～3	4	5～7	計
1～3	14	21	44	79
4	14	22	52	88
5～7	15	30	157	202
計	43	73	253	369

χ^2＝ 9.356＊＊

C (I, J, K)＝7

C (I, K) / C (I, J)	1～3	4	5～7	計
1～3	15	13	7	35
4	7	28	30	65
5～7	0	29	181	210
計	22	70	218	310

P＝ 0.000＊＊＊

女子　C (I, J, K)＝1

C (I, K) / C (I, J)	1～3	4	5～7	計
1～3	10	2	0	12
4	7	0	1	8
5～7	58	12	0	70
計	75	14	1	90

C (I, J, K)＝2

C (I, K) / C (I, J)	1～3	4	5～7	計
1～3	29	3	22	54
4	24	3	2	29
5～7	129	11	17	157
計	182	17	41	240

χ^2＝23.611＊＊＊

C (I, J, K)= 3

C (I, K) / C (I, J)	1～3	4	5～7	計
1～3	34	23	29	86
4	30	9	15	54
5～7	94	45	68	207
計	158	77	112	347

χ^2= 0.304

C (I, J, K)= 4

C (I, K) / C (I, J)	1～3	4	5～7	計
1～3	28	68	179	275
4	47	73	104	224
5～7	78	131	203	412
計	153	272	486	911

χ^2=14.198 ＊＊＊

C (I, J, K)= 5

C (I, K) / C (I, J)	1～3	4	5～7	計
1～3	34	53	115	202
4	50	55	101	206
5～7	46	66	392	504
計	130	174	608	912

χ^2=14.328 ＊＊＊

C (I, J, K)= 6

C (I, K) / C (I, J)	1～3	4	5～7	計
1～3	20	14	57	91
4	9	21	58	88
5～7	11	26	397	434
計	40	61	512	613

χ^2=58.663 ＊＊＊

C (I, J, K)= 7

C (I, K) / C (I, J)	1～3	4	5～7	計
1～3	21	9	20	50
4	5	9	21	35
5～7	6	11	145	162
計	32	29	186	247

χ^2=59.558 ＊＊＊

注）χ^2検定及び直接確率計算による検定はC（I,J），C（I,K）の評定が４の場合を除く２×２の分布についての結果である。

C（I，J，K）が１と低い場合は，C（I，J）は高く，C（I，K）が低いことが多い。C（I，J，K）が２になると，C（I，J）とC（I，K）の一方が高く，他方が低いという場合が増加する。C（I，J，K）が４以上ではC（I，K）が高くなり，C（I，J）を凌駕するようになるが，C（I，J）も依然高い。その結果C（I，J）とC（I，K）が共に高い場合が増加する。C（I，J，K）が７となると，C（I，J）とC（I，K）が共に高い場合が断然多くなる。

JのKに対する認知が１の場合，即ち「とてもきらいだろう」という認知をしている場合には，その認知の主体IはJに対しては５～７と好きであるが，Kに対しては１～３と嫌っていることが断然多い。その逆にIがKに対してかなり好きで，IがJに対してはかなり嫌いという場合とか，IがJもKも共にかなり嫌いとかいうことは少ない。このことは，認知の主体がKをかなり嫌っている場合には，主体が好きなJは，やはりKを嫌っているという認知が成立しやすいことを示すものであろう。表では１～３というように包括的な数になっているが，詳しい分布をみると，主体がJに対しては７であるが，Kに対しては１という場合が非常に多い。自分の友人は，自分の嫌っている者を嫌っているという認知は，ある種のバランス状態であるといえるであろう。

JのKに対する好悪感情の認知が２の場合や３の場合には，その傾向は徐々に薄れていくものの，残っている。JのKに対する好悪感情の認知が２の場合には，Jに対して好きであり，Kに対して嫌いという場合が多い。しかし，逆のKに対して好きであり，Jに対して嫌いという場合も増加する。JのKに対する好悪感情の認知が３の場合，JまたはKに対して好きであるが，一方のKまたはJについて嫌いである場合が依然多いが，好きの方向に移っていく傾向がみられる。JのKに対する好悪感情のIの認知が４以上になると，JもKもかなりすきとい

いう場合が益々増加する。Ｉの認知が７の場合は，ＪとＫとに対して共に５～７という場合が断然多くなる。これも好悪感情とその認知にある種のバランスが成立していることになる。

２）ＩのＪとＫに対する好悪感情及びＪのＫに対する好悪感情の認知とＫのＪに対する好悪感情の認知

まず，ＪのＫに対する好悪感情についてのＩによる認知と，ＫのＪに対する好悪感情についてのＩによる認知の関連をみることにしよう。ＪのＫに対する好悪感情についてのＩによる認知Ｃ（Ｉ，Ｊ，Ｋ）と，ＫのＪに対する好悪感情についてのＩによる認知Ｃ（Ｉ，Ｋ，Ｊ）の関連を示したのが表３である。この度数は，あるＩがあらゆるＪのＫに対する好悪感情についての認知の数をＩについて合計したものであり，ＪのＫに対するＩの認知とＫのＪに対するＩの認知を組み合わせて示したものである。

表３　ＪのＫに対する好悪感情についてのＩによる認知及びＫのＪに対する好悪感情についてのＩによる認知

男子

A＼B	1	2	3	4	5	6	7	計
1	8	9	10	49	16	8	2	102
2	7	7	8	22	13	12		69
3	21	8	17	66	24	14	3	153
4	45	9	36	443	157	51	13	754
5	11	4	10	102	114	38	21	300
6	12	4	5	15	29	62	34	161
7	1	1	2	8	10	23	96	141
計	105	42	88	705	363	208	169	1680

女子

A＼B	1	2	3	4	5	6	7	計
1	1	11	5	15	15	7	2	56
2	5	16	20	47	27	11	3	129
3	4	16	24	68	53	19	3	187
4	11	43	60	180	123	49	5	471
5	9	14	31	98	178	87	7	424
6	4	7	18	28	84	118	35	294
7		4	2	4	8	28	73	119
計	34	111	160	440	488	319	128	1680

注）Ａ；Ｃ（Ｉ，Ｊ，Ｋ），Ｂ；Ｃ（Ｉ，Ｋ，Ｊ）

表を みると，ＪのＫに対する好悪感情についてのＩの認知とＫのＪに対するものを比較して，両認知は同一なものが多く，特に４水準以上では，同一な場合が多い。相関係数をみると，男子では．４３０，女子では．２５８となり，さほど高くはない。

男子ではＣ（Ｉ，Ｊ，Ｋ）とＣ（Ｉ，Ｋ，Ｊ）とも１の水準の場合が多く，２の水準ではそれより少なくなっている。しかし，女子は４の場合が最も多く，それ以上またはそれ以下では次第に度数は少なくなる。

Ｊに対するＩの好悪感情Ｃ（Ｉ，Ｊ）とＫに対するＩの好悪感情Ｃ（Ｉ，Ｋ）及びＪのＫに対する好悪感情のＩによる認知Ｃ（Ｉ，Ｊ，Ｋ）とＫのＪに対するＩによる認知Ｃ（Ｉ，Ｋ，Ｊ）の関連をみることにしよう。

Ｃ（Ｉ，Ｊ）及びＣ（Ｉ，Ｋ）別のＣ（Ｉ，Ｊ，Ｋ）とＣ（Ｉ，Ｋ，Ｊ）との関連を示したのが表４である。これらの表は，ＩのＪ及びＫに対する好悪感情，即ちＣ（Ｉ，Ｊ）及びＣ（Ｉ，Ｋ）の組み合わせ別に，ＪとＫの相互の好悪感情についてのＩの認知，即ちＣ（Ｉ，Ｊ，Ｋ）とＣ（Ｉ，Ｋ，Ｊ）の関連を示している。

表４　ＩのＪ及びＫに対する好悪感情の水準別ＪのＫに対する好悪感情についてのＩによる認知及びＫのＪに対する好悪感情についてのＩによる認知

男子

－１　Ｃ（Ｉ，Ｊ）＝１～３　Ｃ（Ｉ，Ｋ）＝１～３

C (I, K, J)＼C (I, J, K)	1～3	4	5～7	計
1～3	8	4	2	14
4	4	2	3	9
5～7	6	3	14	23
計	18	9	19	46

Ｐ＝ .026 ＊

－２ C (I, J)＝１～３　C (I, K)＝４

C (I, K, J) / C (I, J, K)	１～３	４	５～７	計
１～３	6	5		11
４	19	25	1	45
５～７	3	3	12	18
計	28	33	13	74

P＝ .003 ＊＊＊

－３ C (I, J)＝１～３　C (I, K)＝５～７

C (I, K, J) / C (I, J, K)	１～３	４	５～７	計
１～３	14	7	2	23
４	29	15	6	50
５～７	18	13	12	43
計	61	35	20	116

P＝ .074

－４ C (I, J)＝４　C (I, K)＝１～３

C (I, K, J) / C (I, J, K)	１～３	４	５～７	計
１～３	12	20	10	42
４	2	19	12	33
５～７	3	2	18	23
計	17	41	40	98

χ^2＝ 5.997 ＊

－５ C (I, J)＝４　C (I, K)＝４

C (I, K, J) / C (I, J, K)	１～３	４	５～７	計
１～３	3	11	6	20
４	11	67	15	93
５～７	1	12	29	42
計	15	90	50	155

P＝ .064

－６ C (I, J)＝４　C (I, K)＝５～７

C (I, K, J) / C (I, J, K)	１～３	４	５～７	計
１～３	11	10	7	28
４	9	88	30	127
５～７	7	32	71	110
計	27	121	108	265

χ^2＝ 26.095 ＊＊＊

－７ C (I, J)＝５～７　C (I, K)＝１～３

C (I, K, J) / C (I, J, K)	１～３	４	５～７	計
１～３	26	52	30	108
４		20	22	42
５～７	2	2	12	16
計	28	74	64	166

χ^2＝ 3.575

－８ C (I, J)＝５～７　C (I, K)＝４

C (I, K, J) / C (I, J, K)	１～３	４	５～７	計
１～３	5	14	19	38
４	7	67	44	118
５～７	2	5	27	35
計	15	86	90	191

χ^2＝ .530

－９ C (I, J)＝５～７　C (I, K)＝５～７

C (I, K, J) / C (I, J, K)	１～３	４	５～７	計
１～３	10	14	16	40
４	9	140	88	237
５～７	7	53	232	292
計	26	207	336	569

χ^2＝ 49.314 ＊＊＊

女子

－１ C (I, J)＝１～３　C (I, K)＝１～３

C (I, K, J) / C (I, J, K)	１～３	４	５～７	計
１～３	25	11	9	45
４	2	3	5	10
５～７	1	4	28	33
計	28	18	42	88

P＝ .000 ＊＊＊

－２ C (I, J)＝１～３　C (I, K)＝４

C (I, K, J) / C (I, J, K)	１～３	４	５～７	計
１～３	8	1	3	12
４	6	9	6	21
５～７	5	6	11	22
計	19	16	20	55

P＝ .006 ＊＊＊

－3 C (I, J)＝1～3　C (I, K)＝5～7

C (I, K, J) / C (I, J, K)	1～3	4	5～7	計
1～3	15	1		16
4	58	13	7	78
5～7	34	13	25	72
計	107	27	32	166

P＝ .106

－4 C (I, J)＝4　C (I, K)＝1～3

C (I, K, J) / C (I, J, K)	1～3	4	5～7	計
1～3	9	18	15	42
4	4	22	5	31
5～7	3	7	34	44
計	16	47	54	117

χ^2= 6.207 ＊

－5 C (I, J)＝4　C (I, K)＝4

C (I, K, J) / C (I, J, K)	1～3	4	5～7	計
1～3	1	3	3	7
4	3	26	11	40
5～7	1	4	33	38
計	5	33	47	85

－6 C (I, J)＝4　C (I, K)＝5～7

C (I, K, J) / C (I, J, K)	1～3	4	5～7	計
1～3	4	3	1	8
4	17	30	21	68
5～7	26	40	43	109
計	47	73	65	185

－7 C (I, J)＝5～7　C (I, K)＝1～3

C (I, K, J) / C (I, J, K)	1～3	4	5～7	計
1～3	24	75	75	174
4	10	23	18	51
5～7	1	3	27	31
計	35	101	120	256

－8 C (I, J)＝5～7　C (I, K)＝4

C (I, K, J) / C (I, J, K)	1～3	4	5～7	計
1～3	4	5	12	21
4	5	24	29	58
5～7	1	7	30	38
計	10	36	71	117

－9 C (I, J)＝5～7　C (I, K)＝5～7

C (I, K, J) / C (I, J, K)	1～3	4	5～7	計
1～3	12	13	22	47
4	9	30	75	114
5～7	17	46	387	450
計	38	89	484	611

χ^2= 49.017 ＊＊＊

注）χ^2検定及び直接確率計算による検定は C (I,J), C (I,K)の評定が 4の場合を除く 2×2の分布について の結果である。

IのKに対する好悪感情とJに対する好悪感情が低い場合には，JのKに対する好悪感情のIによる認知及びKのJに対する認知が共に高くなるか，共に低くなる場合が多い。つまり，IがJ及びKに対して嫌っている場合には，JとKは相互に好ましく思っている場合やJとKは相互に嫌っている場合が多い。IがJとKを両者とも嫌っている場合は，自分の嫌っているもの同士が相互に好き合っているとみたり，相互に嫌い合っているとみる傾向が強いことを示している。相互に好き合っているとみることは，バランス状態である。しかし，嫌い合っているとみることは，インバランスである。（男子及び女子の表4－1）

IのKに対する好悪感情が低く，IのJに対する好悪感情が高い場合には，JのKに対する好悪感情のIによる認知は低く，KのJに対するIによる認知が中程度以上に高くなることが多い。つまり，IがJに対しては好ましく思い，Kに対しては嫌っているという場合には，JはKを嫌っていると思うことが多い。このことは

自分がＪを好み，自分がＫを嫌っている場合，ＪがＫを嫌っているという認知の成立し，ＫがＪを中程度以上の好ましいと思っている認知が成立するということになる。(男子及び女子の表４－７)

ＩのＫに対する好悪感情が高く，ＩのＪに対する好悪感情が低い場合には，ＫのＪに対する好悪感情のＩによる認知は低く，ＪのＫに対する好悪感情のＩによる認知は中程度以上になることが多い。つまり，ＩがＪに対して嫌っており，Ｋに対しては好ましく思っているという場合には，ＫはＪを嫌っていると思い，ＪはＫを中程度以上に好ましく思うことが多い。このことは自分がＫを好み，自分がＪを嫌っている場合，ＫがＪを嫌っているという認知の成立し，ＪがＫを中程度以上の好ましいと思う認知が成立するということになる。この傾向はすでに述べられてきた結果と符合する。(男子及び女子の表４－３)

また，ＩのＪに対する好悪感情とＩのＫに対する好悪感情が共に高くなる場合，ＪのＫに対する好悪感情のＩの認知，ＫのＪに対する好悪感情のＩの認知が高くなる傾向が顕著である。つまり，ＩがＪ及びＫを好ましく思っている場合には，ＪとＫの相互は好き合っているとＩが思うことが多い。これもバランス状態と考えられる。(男子及び女子の表－９)

一般に，自分が好ましく思っている者に対しては，他者も好きに思っていると認知することになり，自分が嫌っている者に対しては，他者も嫌っていると思うことになる。特に，自分が嫌っている相手に対しては，自分の好きな相手も嫌っていると思うことになるという傾向を示していると考えられる。自分の好いている相手（または好悪どちらでもない相手）同士に対しては，共に好ましく思う傾向があり，好いている程度が強くなれば，この傾向も顕著となる。

表４で，Ｋに対するＩの好悪感情と，ＪのＫに対する好悪感情のＩの認知との間に類似する傾向がみられた。つまり，Ｋという対象に対する好き嫌いとＫに対する他者の好き嫌いについてのＩの認知とは一致する傾向がみられた。しかもその一致傾向は，Ｉが他者Ｊを好きか嫌いかの程度によって異なることが明かとなった。そこで，ＩのＪに対する好悪感情の水準別に，ＩのＫに対する好悪感情とＪのＫに対する好悪感情のＩによる認知との相関係数をみることにしよう。即ち，Ｃ(Ｉ，Ｊ)の各段階毎にＣ(Ｉ，Ｋ)とＣ（Ｉ，Ｊ，Ｋ）との相関係数をみると，表５の通りとなる。一般に，Ｃ（Ｉ，Ｊ）が低いときには，相関係数はかなり低く，女子では負の値ですらある。しかし，Ｃ（Ｉ，Ｊ）が高くなるに伴って，相関係数が高くなる。このことは，Ｋに対するＩの好悪感情とＫに対するＪの好悪感情に関するＩの認知は，Ｊに対するＩの好悪感情によって異なり，それが正の高い値

表５　ＩのＪに対する好悪感情の水準別ＩのＫに対する好悪感情とＪのＫに対する好悪感情のＩによる認知との相関係数

男子

C (I, J)	R	T	df
1	.011	.147	166
2	.114	1.202	110
3	.075	1.215	264
4	.322	10.402 ***	936
5	.418	13.555 ***	866
6	.557	15.041 ***	502
7	.691	21.404 ***	502

女子

C (I, J)	R	T	df
1	−.103	− 1.282	152
2	.183	2.686 **	208
3	.245	5.078 ***	404
4	.306	8.143 ***	642
5	.583	16.312 ***	516
6	.596	21.473 ***	838
7	.688	22.931 ***	586

注）**；P< .01，***；P< .001

をとるに伴って，関連が強くなることになることを示すものであろう。

ある者Kに対する自分の好悪感情と，他者のKに対する好悪感情は同じように見られる傾向があることは，以前の結果から明かとなったが，その関連は他者に対する自分の好悪感情が強い場合に強固となることになる。自分が好意的なKは，すべての他の人から好かれ，自分が非好意的なKは，すべての他の人から嫌われていると知覚するという傾向ではない。

要するに，自分の好きな相手（J）は，別の好きな相手（K）も好きだと思うと認知する傾向が強い。しかし，自分の好きな別の相手（J）は，嫌いな相手（K）に対しても嫌いだと思うと認知する傾向が強い。

3）IのJに対する好悪感情とJのIに対する好悪感情のIによる認知

これまで，3者間における好悪感情とその認知について検討してきた。しかし，3者内における2者の好悪感情とその認知についても検討しておくことにしよう。3者間という場合には，JとKに対するIの好悪感情とIに対するJとKの好悪感情のIによる認知を問題にしなければならないが，ここでは3者内に限定することなく，Iが他者に対する好悪感情と他者がIに対する好悪感情のIによる認知との関連を一般的に検討することにしよう。IのJに対する好悪感情C（I，J）とJのIに対する好悪感情のIによる認知C（I，J，I）の関連をみる。男子のC（I，J）の平均は，4．713，及び標準偏差は，1．537であり，C（I，J，I）の平均は，4．621，標準偏差は1．266である。両変数の相関係数は0．743，T_0は17．112，P<．001で有意となっている。女子のC（I，J）の平均は，4．796，標準偏差は，1．697であり，C（I，J，I）の平均は4．563，標準偏差は1．277である。両変数の相関係数は0．697，T_0は15．015，P<．001で有意である。

考　察

本研究では，3者間にみられる好悪感情とその認知を，個人Iが任意のJとKに対する好悪感情とJ，K間の相互の好悪感情についての個人Iの認知との関連を中心に検討した。個人Iが好意的なJは，Iが好意的なKであればあるほどそのKから好かれ，個人Iが非好意的であるJは，Iが非好意的なKであればあるほどそのKから嫌われていると知覚することが予想された。そして，これらの予想を検証することが本研究のねらいであった。結果は，個人Iが好意的なJは，Iが好意的なKであればあるほどそのKから好かれるという点では，ほぼこの予想が当てはまることを示すことができた。しかし，個人Iが非好意的であるJは，Iが非好意的なKであればあるほどそのKから嫌われていると知覚するという関連は，度数分布における頻度からある程度認められたが，予想に違う場合もかなりあった。また，Jに対するKの好悪感情についてのIによる認知と，IのJに対する好悪感情との相関係数は，IのKに対する好悪感情の低い場合には低くなった。これはIのKに対する好悪感情の低い場合には，両変数の関連がなくなっていき，積極的な関連が微弱となっていくことを意味するのである。従って，個人Iが非好意的であるJは，Iが非好意的なKであればあるほどそのKから種々様々の好悪感情をもたれると知覚されるという説明が可能となる。このような結果には，多くの要因が影響を及ぼしていると考えられるから，これらの要因について，今後検討が加えられなければならないであろう。

ここでは2者間と3者間の対人感情や対人認知を，相互に関連するものとして取り上げて，詳しく検討する機会がなかった。しかし，個人Iによる任意のJとKに対する好悪感情と，その個人Iに対するJとKの好悪感情についての個人Iの認知との関連を3者関係の中において

取り上げることは必要であろう。また，構成員が４人以上の集団における２者間，３者間の好悪感情とその認知の位置付けに関しても検討する必要があろう。これらの問題の解決は，今後に残されている。

参考文献

Asch, S.E. 1946, Forming impressions of personality. Journal of Abnormal and Social Psychology, 41, 258-290.

Bender, I.E. and A.H.Hastorf, 1953, On measuring generalized empathic ability (social sensitivity). Journal of Abnormal and Social Psychology, 48, 503-506.

Bruner, J.S. and R.Tagiuri, 1954, The perception of people. In G.Lindzey (ed.), Handbook of social psychology,vol.II

Cronbach, L.J., 1955, Processes affecting scores on "understanding of others" and "assumed similarity". Psychological Bulletin, 52,177-193.

Dymond, R.F., 1949, A scale for the measurement of empathic ability. Journal of Consulting Psychology, 13, 127-133.

Dymond, R.F., 1950, Personality and and empathy. Journal of Consulting Psychology,14, 343-350.

Fiedler, F.E., 1964, A contingency model of leadership effectiveness. In L. Berkowitz(Ed.), Advances in experimental social psychology.

Hastorf, A.H. and I.E. Bender.1952. A caution respecting the measurement of empathic ability. Journal of Abnormal and Social Psychology, 47, 574-576.

Hastorf. A.H.,D.J. Schneider. and J. Polefka, 1970, Person perception. 高橋雅春訳，1978，対人知覚の心理学（キースラー，C．A．編，広田君美監修，現代社会心理学の動向　第２巻）

岩下豊彦，1964，対人感情およびその知覚の機制に関する基礎的研究（３）；他者→自己，他者→他者の対人感情の知覚，心理学研究，第３５巻，57-69.

Heider, F., 1958, The psychology of interpersonal relations,大橋正夫訳，1978，対人関係の心理学.

Jourard. S.M. and P. Lasakow, 1958, Some factors in self-disclosure. Journal of Abnormal and Social Psychology,56, 91-98.

梶田叡一，1967，自己評価と自己のパフォーマンスの評価――他者に感じる魅力を規定する要因として，心理学研究，38．63－72.

Laing, R.D., 1961, Self and Others. 志貴春彦，笠原嘉訳，1975，自己と他者

Markus, H. and R.B. Zajonc, The cognitive perspective in social psychology. In G. Lindzey. and E. Aronson,(eds.), 1985, Handbook of social psychology(third edition)Vol. I, 137-230.

大橋正夫，1956，選択行動と対人的知覚の研究（II）；他の成員の別の成員に対する態度の知覚，心理学研究，第２７巻，193-203.

太田雅夫，1986，対人関係の研究：自己と他者における対人認知の差異について，金沢大学教育学部教育工学研究，第12号，79－91.

太田雅夫，1986，対人関係の研究：自己と他者における対人認知の差異について(2)，金沢大学教育学部　教科教育研究，第22号，　265－ 270.

太田雅夫，1991，集団構造に関する研究；相互選択集団における重層構造と対人関係を中心として，金沢大学教育学部紀要，第４０号，45-53.

Tagiuri, R., 1952. Relational analysis; an extension of sociometric method with emphasis upon social per-ception. Sociometry, 15, 91-104.

Tagiur, R., R.R. Blake, and J.S. Bruner, 1953, Some determinants of the perception of positive and negative feelings in others. Joumal of Abnormal and Social Psychology, 48, 585-592.